

イザヤ書13-15章 「イスラエルのそばにいて」

1A モアブの泣き叫び 15-16

1B 領土全体 15

1C 全住民 1-4

2C 主ご自身 5-6

3C 逃れる者 7-9

2B 収穫の喪失 16

1C シオンへの逃れの道 1-5

2C 高慢による破滅 6-14

2A ダマスコの破壊 17

1B 衰えるイスラエル人の栄光 1-11

1C 廢墟の町 1-3

2C わずかに残される者 4-6

3C まことの神の忘却 7-11

2B 略奪者の分け前 12-14

本文

イザヤ書 15 章から読んでいきます。私たちは、13 章からユダとイスラエルの周囲の国々に対する神の宣告を読んでいます。初めに、イザヤはバビロンを預言しました。バビロンがメディア・ペルシヤによって滅んで、永遠の廢墟となることを預言しました。預言当時は、アッシリヤの脅威があるけれども、バビロンは台頭だにしていません。では、なぜ初めにバビロンを預言したのか？それは、そのバビロンは紀元前 539 年に滅ぼされるバビロンのみならず、聖書の歴史の初めから終わりまで、神に反抗する大きな都として立っている、悪魔によって動かされているこの世を表していたからです。

そして 13 章 24 節以降に改めて、アッシリヤがエルサレムを包囲するが、主がそこで彼らを打ち砕かれることを約束しておられます。大事なのは、「わたしはアッシリヤをわたしの国で打ち破り、わたしの山で踏みこむ。(25 節)」と言っていることです。ユダをご自分の国、シオンの山をご自分の山と言われています。したがって、この方にこそ救いがあり、力があることを表しておられます。しかし、周囲の国々が果たして、そのことに気づいているのか？ということが問題です。神を知らないと言っても、周囲の国々はイスラエルを見て、神がどのような方かその証しを目撃していました。ですから、光は照らされたのであって、弁解の余地はありません。これはちょうど、福音を伝えられる、クリスチャンに取り囲まれている人々に似ているでしょう。聞いてはいるのです、けれども、自分がその神に信頼を寄せるのかと言うと、そうではありません。

それで、これまで通りにアッシリヤの脅威に対して人間的な方法で解決策を練ります。反アッシ

リヤ同盟を結び、アッシリヤに対抗しようとしていました。そうした外交活動を活発に行っていました。そこで 14 章 28 節に、ペリシテへの宣告があります。彼らはユダが弱められると攻めていましたが、その反抗的な精神はアッシリヤに対しても向けていました。それでアッシリヤが南下してきた時にことごとく踏み荒らされます。そうなる前にペリシテはエルサレムに使者を送り、同盟を持ちかけてきた時に、イザヤはこう答えました。32 節です、「主はシオンの礎を据えられた。主の民の悩む者たちは、これに身を避ける。」アッシリヤに逆らうのでもなく、またアッシリヤに服従し、従属するのでもなく、主ご自身に拠り頼みなさいというメッセージです。

午前礼拝でも話しましたが、この世の中にあることについて、「こうすべきだ、ああすべきだ」と人間的にいろいろ模索するのですが、そのどちらでもなく、「主のみに仕えなさい。あなたが一大事だとしているこれらのことは、大したことではない。主にお任せしなさい。」と勧めているのです。しかし、主に拠り頼むこと、希望を抱くことについてはしっかりと行ないなさい。このことに、怠慢であってはならない、ということであります。この宣告に対して、続けて周囲の国々がどのように応答しているのか、それを 15 章から見ていくことができます。

1A モアブの泣き叫び 15-16

1B 領土全体 15

1C 全住民 1-4

1 モアブに対する宣告。ああ、一夜のうちにアルは荒らされ、モアブは滅びうせた。ああ、一夜のうちにキル・モアブは荒らされ、滅びうせた。2 モアブは宮に、ディボンは高き所に、泣くために上る。ネボとメデバのことで、モアブは泣きわめく。頭をみなそり落とし、ひげもみな切り取って。3 そのちまたでは、荒布を腰にまとい、その屋上や広場では、みな涙を流して泣きわめく。4 ヘシュボンとエルアレは叫び、その叫び声がヤハツまで聞こえる。それで、モアブの武装した者たちはわめく。そのたましいはわななく。

ペリシテは、ユダの西にある地中海沿いの国ですが、モアブはユダの東にある国です。死海をまたいで東側にあります。覚えていますか、ロトと未婚の娘二人はソドムへの災いから免れて、小さな町ツォアルに隠れました。ツォアルは、死海の南端にあったのではないかと一般に言われています。そこで、娘二人は自分たち以外に生き残っている人たちがいないと思い込んでいました。それで、近親婚であっても子孫を残さないといけないうして、父を泥酔させて、それで父のところそれぞれ娘が入りました。そこで生まれたのがモアブであり、アモンです。モアブ人はその辺り、死海の東に定住するようになり、アモン人はモアブの北東に定住するようになりました。

主はイスラエルに対して、モアブとは争ってはならないと命じておられました。「申命記 2:9 モアブに敵対してはならない。彼らに戦いをしかけてはならない。あなたには、その土地を所有地としては与えない。わたしはロトの子孫にアルを所有地として与えたからである。」けれども、モアブ人はイスラエルに敵対するようになります。バラムを雇ったのはモアブ人バラクでした。そして士師の時代には、モアブの王エグロンがイスラエルを虐げて、それで主がエフデという左利きの士師を起こ

しました。それから、ダビデの時代、ダビデはモアブを屈服させました(2サムエル 8:2)。それ以来、モアブは貢物を納める国、イスラエルに従属する国となりました。

けれども、イスラエルが神に背いて国が弱くされるに従って、モアブは背いていきました(2列王 1:1)。そして、北イスラエルは、あのシリアと手を結んでユダを攻めようとしたペカが王であった時に、アッシリヤが攻めてきて、北イスラエルの多くの領土を取られました(2列王 15:29)。その中に、「ギリアデ」があります。そこはマナセの半部族やガドが住んでいた所です。こうしたイスラエル人が捕え移されていったところに、南に位置するモアブは自分たちのものとして、イスラエルのいくつかの町々に住んでいったのでしょう。

このようにして、モアブは、自分たちは戦って負けることはあったものの、住んでいる町々は攻められることは基本的にありませんでした。地形的には平らな高地にあり、北にあるギリアデは険しい山地なので、北から攻めてくるには難しいところなのです。それに加え、アルノン川という深い溪谷が死海の中部に走っています。ですから、地形的にかなり守られているのです。ところがそのために、自分が主なる神に頼ることの必要性を感じていないという、高ぶりへとつながっています。

これが、私たちの生活に直接つながっています。つまり、「安定したところにある高ぶり」です。

1

1 節にある「アル」は、モアブの代表的な町です。初めはここが都だったのかもしれませんが。アルノン溪谷のすぐ南にあります。「キル・モアブ」はモアブの首都であり、さらに南にある町で、今はヨルダンの「カラク」という町になっています。したがって、「一夜のうちに、京都が荒らされ、東京が滅んだ。」と言っている感じです。アッシリヤが一気に攻めてきて、それでモアブ全体を侵略したということです。

そして、2 節はモアブ人たちが、自分たちの神ケモシュに祈っているけれども、何の役にも立っていない、



1 <http://meigata-bokushin.secret.jp/index.php?%E3%83%A2%E3%82%A2%E3%83%96%E3%81%AB%E5%AF%BE%E3%81%99%E3%82%8B%E4%B8%BB%E3%81%AE%E5%98%86%E3%81%8D%E3%81%AE%E6%AD%8C>

ケモシュが自分たちを救っていないことで嘆き悲しんでいます。ディボン、ネボ、メデバは、アルノン川の北にある町々ですが、そこに宮があったのでしょうか。そして3節は、屋上や広場において嘆き悲しんでいるというのは、一般の人々が生活の全てに対して荒らされてしまっている、ということです。軍隊と軍隊が戦って、一般庶民は戦争が起こっていることさえ気づかないということではなく、一般市民を含む無差別殺戮をアッシリヤが行なったということです。そして4節の、ヘシュボン、エルアレは、ディボン、ネボ、メデバより少し北にあります。ヤハツは、少し南にあります。モアブがそこで戦っていて、アッシリヤにことごとく滅ぼされ速やかに南下していくのを見て、叫んでいるのでしょう。

2C 主ご自身 5-6

5 わたしの心はモアブのために叫ぶ。その逃げ延びる者はツォアルまで、エグラテ・シェリシヤまでのがれる。ああ、彼らはルヒテの坂を泣きながら上り、ホロナイムの道で、破滅の叫びをあげる。
6 ああ、ニムリムの水は荒廃した地となり、草は枯れ、若草も尽き果て、緑もなくなった。

モアブの人たちが必死に逃げています。ツォアルは死海南端の町で、そこからユダのほうに回って逃げようとしているのでしょうか。それから、ルヒテの坂、ホロナイムの道とは、死海が真ん中で細くなっていて、乾季には陸続きになるところです。ダビデが両親をモアブ人の王に託した時に、おそらくこの道を使ったのではないかと思われます。これもまたそこを渡ろうとして逃げようとしているけれども、間に合っていない姿です。ニムリムは、死海南端に注ぐ溪谷です。アッシリヤが他の土地を侵略するときに使った方法の一つに、水源を塞いでしまうことがあります。ニムリムの水を塞いだので、彼らの水がなくなり、またその地域の草木を枯らしていきました。

ここで注目したい言葉が、「わたしの心はモアブのために叫ぶ。」であります。主がこの災いを起こしているのですが、しかしこの災いがモアブに降りかかることを叫んで、泣いておられるのも同じ主なのです。主は、シオンにこそ救いがあるとイザヤを通して語っておられるのに、ご自分のところに来れば安全であると語っておられるのにその言うことを聞かないなら、アッシリヤの攻撃にさられるがままにするしかないのです。このことを最も願っておられないのは主ご自身であり、その涙をここで見るすることができます。

主がエゼキエルを通して言われました。「エゼキエル 18:23 わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。・・神である主の御告げ。・・彼がその態度を悔い改めて、生きることを喜ばないだろうか。」イエスご自身も言われました。「ヨハネ 3:16-17 神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。」そして、ご自分のところに来ない人々のことをイエスは涙を持って嘆かれました。「ルカ 19:41-44 エルサレムに近くなったころ、都を見られたイエスは、その都のために泣いて、言われた。「おまえも、もし、この日のうちに、平和のことを知っていたのなら。しかし今は、そのことがおまえの目から隠されている。やがておまえの敵が、おまえに対して壘を築き、回りを取り巻き、四方か

ら攻め寄せ、そしておまえとその中の子どもたちを地にたたきつけ、おまえの中で、一つの石もほかの石の上に積まれたままでは残されない日が、やって来る。それはおまえが、神の訪れの時を知らなかったからだ。」私たちが、主のところに来ない人々に対して同じ嘆きと憐れみの心を持っていたいのです。

3C 逃れる者 7-9

7 それゆえ彼らは、残っていた物や、たくわえていた物を、アラビム川を越えて運んで行く。8 ああ、叫ぶ声がモアブの領土に響き渡り、その泣き声がエグライムまで、その泣き声がベエル・エリムまで届いた。9 ああ、ディモンの水は血で満ちた。わたしはさらにディモンにわざわいを増し加え、モアブののがれた者と、その土地の残りの者と共に獅子を向けよう。

「アビラム川」はおそらくゼレデ川のことでしょう。つまり、今、モアブの国境を越えてエドム人の地に逃げていっているということです。大量の難民が発生した状態です。エグライムやベエル・エリムはどこにあるか分かりませんが、おそらく南端の町々なのだと思います。ついにモアブ全土が、叫び声で埋め尽くされてしまいました。

そして、ディモンですが、これはディボンと同じだと思います。ここでの「血」は、列王記第二 3 章にある、モアブ人の王メシャの時の出来事を思い出させるものです。メシャがイスラエルに反逆するので、イスラエルが南のユダと連合し、またエドム人もそれに加わり、エドムの荒野の道を歩いていましたが、水が尽きてしまいました。そこでエリシャが預言しましたが、「この谷に、溝を掘れ、溝を掘れ。」と言いました。何の水もないのに掘れと言うのです。けれども、実は他のところで雨が降っていたので、一気にその谷に水が流れて、溝には水がいっぱいになりました。メシャが近づいてくると、朝日の反射でその水が赤く染まっていた。それを見て、「同士打ちをしているのだ」と思い込み攻めたところ、イスラエル軍がいて、イスラエルがモアブを打ちました。その後で、取り囲まれたメシャは、モアブの都キルで、なんと自分の長男をいけにえとして捧げたのです。ケモシュの神はこんなことを要求するわけですが、こんなを見ていられないとしてイスラエル人たちは帰りました。こんな話ですが、ケモシュの宮のあるディモンでは、水に反射する血の色ではなく、実際に血が流されていった。そしてケモシュの神に対する裁きを続けて行なうと神は宣言されています。

2B 収穫の喪失 16

1C シオンへの逃れの道 1-5

1 子羊を、この国の支配者に送れ。セラから荒野を経てシオンの娘の山に。2 モアブの娘たちはアルノンの渡し場で、逃げ惑う鳥、投げ出された巣のようになる。

「セラ」は、エドムの町です。そこにおそらく、使者を送ってユダの荒野を通り、エルサレムに行こうとしているのでしょう。「子羊を、この国の支配者に送れ。」というのは、モアブはイスラエルに貢物として羊を納めていたからです(1列王 3:4)。指導部は、セラを避難所としていたのですが、モア

ブの人々はアルノン川のところでユダに渡ろうとして逃げまどっている状態です。

3 助言を与え、事を決めよ。昼のさなかにも、あなたの影を夜のようにせよ。散らされた者をかくまい、のがれて来る者を渡すな。4 あなたの中に、モアブの散らされた者を宿らせ、荒らす者からのがれて来る者の隠れ家となれ。しいたげる者が死に、破壊も終わり、踏みつける者が地から消えうせるとき、5 一つの王座が恵みによって堅く立てられ、さばきをなし、公正を求め、正義をすみやかにこなう者が、ダビデの天幕で、真実をもって、そこにすわる。

3-4 節前半は、モアブの指導層がエルサレムに向かって、我々逃げてくる者たちを匿ってくれと願っているように見えます。けれども、イザヤが答えて、「虐げる者がアッシリヤで、アッシリヤが消えてなくなる時に、ダビデの末裔から出てくるキリストがここから正しい統治を行なう、だからこの方に頼れ、というメッセージに聞こえます。けれども 6 節以降で、モアブがその声に聞き従わないで、破滅が彼らに襲うという流れに読めます。

けれども、5 節は明らかにキリストが王として地上に戻ってこられる時、主はエルサレムのオリブの山に立たれることの預言です(ゼカリヤ 14:4)。したがって、その前の 3-4 節は、モアブ人が逃れる人々ではなく、モアブの地に逃れて来ているユダヤ人として他の箇所でも預言されていることと同じことを預言しているのではないかと、とも読めます。

イザヤ書 34 章には、こう書かれています。「天ではわたしの剣に血がしみ込んでいる。見よ。これがエドムの上を下り、わたしが聖絶すると定めた民の上を下るからだ。主の剣は血で満ち、脂肪で肥えている。子羊ややぎの血と、雄羊の腎臓の脂肪で肥えている。主がボツラでいけにえをほふり、エドムの地で大虐殺をされるからだ。」主がボツラに行かれます。現代のヨルダンにペトラという町がありますが、そこがボツラではないかと言われています。「野牛は彼らとともに、雄牛は荒馬とともに倒れる。彼らの地には血がしみ込み、その土は脂肪で肥える。それは主の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年である。(5-8 節)」シオンの訴え、つまりユダヤ人を襲う敵に対して戦われる時、主は天からボツラへ向かわれるのです。

そしてイザヤ書 63 章1節を読みます。「『エドムから来る者、ボツラから深紅の衣を着て来るこの者は、だれか。その着物には威光があり、大いなる力をもって進んで来るこの者は。』正義を語り、救うに力強い者、それがわたした。』」天からまずボツラへと向かい、ユダヤ人の敵、また神の敵と戦われ、そのために着物が真っ赤に染まっているのです。そしてゼカリヤ書 12 章 10 節を読むと、エルサレムの住民に主が現れて、彼らを救ってくださることが書かれていますが、ボツラのほうからエルサレムへと向かい、その間ずっと敵と戦われることが分かります。

これがハルマゲドンの戦いです。世界の軍隊がイスラエルのメギドに集まってくるのですが、その戦いの場は、最終的にモアブとエドムの辺りからエルサレムにまたがる広域であることが分かります。黙示録 14 章の最後を読みますと、主が怒りの酒ぶねを踏まれる時に、その血が 1600 スタ

ディオンに広がる、とあります。1600 スタディオンは約 300 キロメートルですが、これがまさにボツラの地域からエルサレムまでの距離と一致しているのです。

ではなぜ主はまず、ボツラのほうに行かれるのでしょうか？先ほど、シオンの仇する者に復讐されるとありましたが、そこにユダヤ人がいるからです。主が十字架につけられる直前、オリーブ山で弟子たちに世の終わりについて語られた時に、主は「逃げなさい」と命じられましたね。「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。）そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。（マタイ 24:15-16）」ユダヤから山に逃げる、というのは、西でもなく南北でもなく、死海のほうに広がる荒野の山々のことです。

そして黙示録 12 章を読みますと、イスラエルを意味している女を悪魔である竜が追いかけている場面があります。「自分が地上に投げ落とされたのを知った竜は、男の子を産んだ女を追いかけた。しかし、女は大わしの翼を二つ与えられた。自分の場所である荒野に飛んで行って、そこで一時と二時と半時の間、蛇の前をのがれて養われるためであった。」ここで、荒野に飛んでいった、とありますが、先ほどのイエス様の命令と同じです。そして、「ところが、蛇はその口から水を川のように女のうしろへ吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした。しかし、地は女を助け、その口を開いて、竜が口から吐き出した川を飲み干した。（以上 13-16 節）」荒野に逃れたユダヤ人たちは、そこで悪魔また反キリストによる攻撃から、かろうじて守られるという約束です。

その地域がモアブであり、ここイザヤ 16 章にあるモアブへの預言は、アッシリヤから逃れるために主が隠れ場を設けてくださるという約束だけではなく、荒らす憎むべき者、反キリストから避ける場所として、主がユダヤ人のために設けてくださる場所の預言でもあるのです。ダニエル書 11 章の最後に、反キリストが世界戦争を起し暴れる預言がありますが、「彼は美しい国に攻め入り、多くの国々が倒れる。しかし、エドムとモアブ、またアモン人のおもだった人々は、彼の手から逃げる。（41 節）」とあります。

2C 高慢による破滅 6-14

6 われわれはモアブの高ぶりを聞いた。彼は実に高慢だ。その誇りと高ぶりとおごり、その自慢話は正しくない。7 それゆえ、モアブは、モアブ自身のために泣きわめく。みな泣きわめく。あなたがたは打ちのめされて、キル・ハレセテの干しぶどうの菓子のために嘆く。8 ヘシュボンの畑も、シブマのぶどうの木も、しおれてしまった。国々の支配者たちがそのふさを打ったからだ。それらはヤゼルまで届き、荒野をさまよい、そのつるは伸びて海を越えた。9 それゆえ、わたしはヤゼルのために、シブマのぶどうの木のために、涙を流して泣く。ヘシュボンとエルアレ。わたしはわたしの涙であなたを潤す。あなたの夏のくだものと刈り入れとを喜ぶ声がやんでしまったからだ。10 喜びと楽しみは果樹園から取り去られ、ぶどう畑の中では、喜び歌うこともなく、大声で叫ぶこともない。酒ぶねで酒を踏む者も、もう踏まない。わたしが喜びの声をやめさせたのだ。

主は、何をもってモアブを高慢、奢っている、自慢していると言っているかと言いますと、ぶどうの収穫に代表される生活の充足です。「私は神を信じるまでもなく、十分幸せだよ。」という態度、これこそが高ぶりであります。ヘシュボンやシブマでとれたぶどうは、荒野を越えてつるが海まで行ったということですが、地中海のことでしょうか。そうするならば、「私たちは十分にイスラエルにもぶどうを産出しているしね。」と自慢している訳です。私たちは高ぶりや奢りという言葉を書く時に、威張り散らすというイメージがありますが、聖書はこのように「自分たちだけで十分やっていますから。」として、主なる神にすがることがないことを高慢と呼びます。

これは、私たちの身近にある大きな問題です。まだ信じていない人々は、自分の生活を大きく変えてまで信仰を持ちたくないと思います。自分たちに起こる変化を憎むのです。けれども、信じている、クリスチャンだと言っている人々も同じです。生活を助けてくれる分には信仰心を持っていきたいが、それ以上の変化は望みません。なぜ、そのように変えなさいと言ってくるのですか！と、かえって気分を害して、責めてきます。こうした反発は、福音とは裏腹のものです。なぜなら、福音は、「私たちにできなくなっていることを、キリストがしてくださいました。」というものだからです。主が命じられることは、初めから今の現実、現状を打ち壊すものだからです。自分では当然変えることはできません。主はそれを願っておられません。ただ、主のところに来ること、主にその力と知恵を求めることを求めておられます。変えられることは、自分のプライド、高慢を捨て去ることです。そうすれば、その砕かれた魂、主に従順になって、「はい、分かりました。お従います。」と信仰の一步を踏み出す時に、現実の生活だけを考えたらできないことを神がキリストにあって行なったださるのです。これが御霊による導き、歩みです。

そしてここで、モアブの泣き叫びに同情されて、主ご自身も涙を流して泣いておられるところに注目してください。彼らがぶどうの収穫によって喜び楽しむことは、主も喜んでおられたのです。しかし、彼らが拒むので主はアッシリヤにこれを荒らすようにさせるしかない。主は、まだ信仰を持っていない人についても、その受けている自然の恩恵を喜んでおられます。しかし、その恵みがかえってその人を高ぶらせ、神を要らないとさせている要因にもなっています。すべてを造り、すべてを施される恵みの神を知るためには、どんな人であっても、神の前でのへりくだりを経験しないといけません。

11 それゆえ、わたしのはらわたはモアブのために、わたしの内臓はキル・ヘレスのために立琴のようにわななく。12 モアブが高き所にもうでて身を疲れさせても、祈るためにその聖所には行って、もうむただ。

イエス様が、羊飼いのいない羊のように群衆が迷っている時に、かわいそうに思われたとありますが、それは肝臓からでてくる感情です。腹で感じるものです。ここでも同じですね、はらわた、内臓がわなないています。そしてもう一度、彼らの信じている偶像礼拝は無駄であることを語っておられます。自分にプライドがある人は、その礼拝は必ず偶像になっています。自分を変えるつもりはないのに、ただ助けだけがほしいというのは、キリストの名を使っていようとその対象は偶像で

す。イエス様は、そうした人々の祈りを聞かれませんが、いや、聞かれることもあります、その人は永遠のいのちを持つことはありません。

13 これが、以前から主がモアブに対して語っておられたみことばである。14 今や、主は次のように告げられる。「雇い人の年期のように、三年のうちに、モアブの栄光は、そのおびたしい群衆とともに軽んじられ、残りの者もしばらくすれば、力がなくなる。」

アッシリヤが攻めてくる前に、イザヤが前もってモアブに告げていました。何度となく伝えていましたが、彼らは聞く耳を持っていませんでした。けれども、今は、雇い人の年期のように、期間が非常にはっきりしている、確かである、ということです。三年と言っていますから、預言が行なわれた時はここから紀元前 704 年ではなかったと思われます。701 年にアッシリヤがこの地域に南進してくるからです。そして、「モアブの栄光は・・軽んじられ」とあります。モアブはこれこれができる、と思っても、アッシリヤが攻めてきた時には多くの人は頼りにしません。軽んじられます。

2A ダマスコの破壊 17

次はダマスコに対する宣告です。この栄光も、主なる神を認めないのに衰えることになります。

1B 衰えるイスラエル人の栄光 1-11

1C 廃墟の町 1-3

1 ダマスコに対する宣告。見よ。ダマスコは取り去られて町でなくなり、廃墟となる。2 アロエルの町々は捨てられて、家畜の群れのものとなり、群れはそこに伏すが、それを脅かす者もいなくなる。3 エフライムは要塞を失い、ダマスコは王国を失う。アラムの残りの者は、イスラエル人の栄光のように扱われる。・・万軍の主の御告げ。

ダマスコは、シリアの首都です。アラムとはシリアの聖書時代の名称です。アラムは創世記の時代が出てきます。アブラハムの家族がカナンに行く前に、一時期ハランに滞在していましたが、そこがアラムの地域です。リベカの兄ラバンは、パダン・アラムでした。そしてソロモンによる統治末期に、ツォバの王から逃亡したレゾンという男が略奪隊の隊長となり、ダマスコを支配しました（1列王 11:24）。その時から、アラムあるいはシリアは絶えずイスラエルと戦っていました。

けれども、ダマスコの町がその独立を失った時、それは皮肉にもイスラエルと仲良くした時です。アハズがユダの王であった時に、アラムはイスラエルの王とともにユダを攻めることにしました。そこでアハズは、アッシリヤに貢ぎ物を持っていき、助けを求めました。アッシリヤはその要望に応じて、シリアと北イスラエルを攻めました。ダマスコは紀元前 732 年に陥落し、サマリヤはその十年後、紀元前 722 年に陥落しました。ダマスコに対する栄光が衰えると宣告している中で、エフライム、つまりイスラエルの栄光が衰えることを話しているのはそのためです。

ここには、大きな教訓があります。「この世と調子を合わせ、そのくびきを負う信者は、不信者と

同じような運命をたどる。」ということです。神の民は、神を自分の神にしているからこそ、その契約によって守られています。ところが、不信者と共に生きるなら、主は救いの区別をすることができなくなります。その典型が、「ロトの妻」ですね。主がせっかく、ソドムに下る災いから逃がしてあげようとしていたのに、彼女は振り向いたので塩の柱になってしまいました。「2コリント6:14-15 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。」

ところで、「ダマスコは取り去られて町でなくなり、廃墟となる。」という言葉は厳密に言うと、アッシリアの征服を受けて後も、そのようにはなりません。ダマスコの歴史は連綿と続いていました。しかし、恐ろしいことに私たちの目の前でシリアが廃墟と化してきています。実に全国民の半分以上が難民化してシリア国内からいなくなっています。

2C わずかに残される者 4-6

4 その日、ヤコブの栄光は衰え、その肉の脂肪はやせ細る。5 刈り入れ人が立穂を集め、その腕が穂を刈り入れるときのように、レファイムの谷で落穂を拾うときのようになる。6 オリーブを打ち落とすときのように、取り残された実がその中に残される。二つ三つのうれた実がこずえに、四つ五つが実りのある枝に残される。・・イスラエルの神、主の御告げ。・・

「その日」とあります。つまり、これは北イスラエルがアッシリアによって倒れることだけではなく、終わりの日にイスラエルがどのようなようになるのかを示している預言です。その日に、ヤコブの栄光は衰えるとあります。豊かで、肥沃なはずの土地がやせ衰えます。また土地だけでなく、その国の国力が衰えます。それを形容するために、刈り入れられた後に残されたもの、また落穂に喩えています。レファイムの谷は、エルサレムの南東に走っている谷ですが、ユダの民には落穂拾いはよく見慣れた光景です。オリーブの木でそれを揺すって、僅かに残っているのも見慣れた光景でしょう。つまり、生き残る者たちがごく僅かになるということです。

3C まことの神の忘却 7-11

7 その日、人は自分を造られた方に目を向け、その目はイスラエルの聖なる方を見、8 自分の手で造った祭壇に目を向けず、自分の指で造ったもの、アシェラ像や香の台を見もしない。

多くの者が滅ぼされますが、それは神の民の清めのためであります。その残された民は、その時こそ人が造った神ではなく、自分を造られた神に頼ります。これはモアブの問題でもありました。彼らの高ぶりは、自分というものを生かしておくことでした。したがって、彼らの求めるものは自分のために利用すること、自分の支配できるもの、つまり偶像なのです。自分を造られた神をあがめるとは、相手が陶器師のようであり、自分は陶器のような位置にいます。それゆえ、自分というものを全く神に明け渡さなければ、造り主との関係を持たないのです。ところが、モアブのように自分に都合の良いことだけで動いていく、その生き方、日和見的な生き方は、神でさえ自分の都合

の良い範囲であがめるといふ、本質において偶像なのです。

そして、そのようなことを神の民として選ばれたイスラエルが行なうということです。これはしたがって、同じく神の民として選ばれている教会に対する戒めでもあるのです。キリストを口で唱えても、自分の願っていることが妨げられるのであれば、神の命令を無視するという態度は、まさしく偶像礼拝であります。

ところで終わりの日における、主のイスラエルに対する働きは既に、イザヤ書 10 章 21-22 節に書かれています。イスラエルにとって大患難は滅ぼされるためではなく、練り清められるための神の懲らしめとなります。これはイスラエルが民族の単位で経験することですが、けれども、個人においてはキリスト者も経験することです。自分が悔い改めていない時に、その霊が救われるために肉体を損なうことがあります。「1コリント 5:5 このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」これはおそらく、性病か何かの病に罹って肉体が損なわれるけれども、それで主に立ち返ることができた、それで主の来られる日には救われる、ということでしょう。

もう一つ、苦しみにによって、肉の欲望から離れることができ清められることを約束している御言葉もあります。「1ペテロ 4:1-2 このように、キリストは肉体において苦しみを受けられたのですから、あなたがたも同じ心構えで自分自身を武装しなさい。肉体において苦しみを受けた人は、罪とのかかわりを断ちました。こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。」私たちが迫害や苦しみを受けると、二つの反応をします。それは神に対して苦みを抱くか、神にむしろ望みを抱くかのどちらかです。心に苦みを抱くと、それによって肉の欲望のままに自分の身を任せます。しかし、同じ苦しみを正しく信仰によって受けとめると、ますます清められて、神の御心を行なうことができるようになります。

9 その日、その堅固な町々は、森の中の見捨てられた所のようになり、かつてイスラエル人によって捨てられた山の頂のようになり、そこは荒れ果てた地となる。10 あなたが救いの神を忘れてあなたの力の岩を覚えていなかったからだ。それで、あなたは好ましい植木を植え、他国のぶどうのつるをさす。11 あなたが植えたものを育てるときに、朝、あなたの種を花咲かせても、病といやしがたい痛みの日に、その刈り入れは逃げうせる。

主が立ち返る前に、イスラエルがどうなるのかが書かれています。9 節の、「かつてイスラエル人によって捨てられた山の頂」というのは、ヨシュアがカナン地に入って、その住民を追い出した後の状態です。今、同じイスラエル人がカナン人と同じ神々を拝んだので、カナン人の町々が荒らされたように、今度はイスラエルの町々も見捨てられた所ようになります。神には、えこひいきはありません。

そして、救いの神に拠り頼むことを、「岩」に頼るのだと言っています。午前礼拝で、主に拠り頼

むことがいかに変わらぬ、堅固なものであるかを学びました。主は、恵みによって王座を堅く立てておられます。岩のように変わることがありません。そしてその力と権威に基づく御国が、私たちの周りで広がっていくのです。ところが、イスラエルは「好ましい植木を植え、他国のぶどうのつるをさす」とあります。シリアとの同盟に抛り頼んだということです。岩と、ぶどうのつるとの対比です。これはあまりにも違います。そして、それは一時的に花を咲かせるけれども、すぐに病にかかるとあります。人間的な助けは、ほんの一時的なものであり、その後は大変な痛手を被るのです。

2B 略奪者の分け前 12-14

そして、再びアッシリヤがエルサレムを襲ってくる預言を繰り返して出しています。

12 ああ。多くの国々の民がざわめき、..海のとどろきのように、ざわめいている。ああ、国民の騒ぎ、..大水の騒ぐように、騒いでいる。13 国民は、大水が騒ぐように、騒いでいる。しかし、それをしかると、遠くへ逃げる。山の上で風に吹かれるもみがらのよう、つむじ風の前でうず巻くちりのように、彼らは吹き飛ばされる。14 夕暮れには、見よ、突然の恐怖。夜明けの前に、彼らはいなくなる。これこそ、私たちから奪い取る者たちの分け前、私たちをかすめ奪う者たちの受ける割り当て。

アッシリヤは帝国なので、「多くの国々」と言って、多くの国々を征服したことを表現しています。それが、大水の騒ぎ、つまり荒波や、おぞましい海の荒々しい姿で形容しています。しかし、それだけの大量の水なのに、突然、つむじ風で拭かれてしまうもみ殻のようになるという、とんでもないことが起こります。ちょうどそれは、エリヤがいけにえに対して水をたくさんかけさせたけれども、天からの火ですべてを飲み尽くしたのと同じように、圧倒的な裁きによって、これらの大きな騒ぎとなっているアッシリヤ軍をなめ尽くすということです。

そして次回、このアッシリヤの動きに対して南の大国であるエチオピアとエジプトはどう動くのか、それを神が眺めておられる部分を見ていきます。私たちに対する神からの警告は、「私たちが、生活の中で襲ってくる騒ぎに対してどう応じているか。」であります。力をもって主がこうした荒波を静めてくださると思って、主の前に出ていく、静まることを選び取るのか。そして、主が恵みをもって持っておられる御国が広がるのを待っているか、この忠実さ、慎み深さが試されています。